No.209

ティーブレイク

Tea Break

最近うれしかったこと

会員　日野　真美

ウソをつくときには目が泳ぐというのは本当だ。

たとえば，子供の保護者会でお友達の親御さんから，親戚の集まりで叔父さんから，あるいは寿司屋のカウンターでとなり合わせた人から職業を尋ねられたとき，「弁理士です」と答えると，必ず0.5秒くらいのヘンな間があった後，尋ねた人は「ああ，そうですか，ベンリシ，ふんふん」などといい，いかにも昔からベンリシなど知っている，ああ，あなたもベンリシねというような雰囲気を醸し出そうとするが，残念ながら目が泳いでいるのである。

そうすると，こちらもそのような目に合わせてしまって大変申し訳ない気持ちがして，そう，ご存じだとは思いますが念のため説明すると，「弁理士というのは発明者の方を助けて，特許庁で特許をとるお手伝いをする仕事なんです。ときには特許権を侵害する人を裁判所で訴えたりもしますよ。」などと説明を試みるが，残念ながら，極めて稚拙な説明者である私は，聞き手の興味をそそることに成功した試しがない。こんなとき，弁理士ではなく弁護士なら，「ほら，堺雅人が（あるいは松潤が）ドラマでやってたでしょ」「ジョングリシャムの書く小説に出てくるやつですよ」などと，あまたある弁護士のドラマや小説から聞き手に合った例を引けばよく，稚拙な説明は不要である。まあ，そもそも弁護士は小学生でも知っているので，そのような問答自体があり得ない。

説明不要な「弁護士」にはドラマや小説が星の数ほどあるのに，是非とも説明が必要な「弁理士」にはドラマも小説もないとは，なんと皮肉なことか，と長年嘆いていたところ，遂に出たのである。女性弁理士が主人公のハードボイルド小説。南原詠氏の「特許やぶりの女王 弁理士・大鳳未来」。

タイトルにあるとおり，主人公は大鳳未来という名前の女性弁理士！この弁理士が大胆不敵，頭脳明晰，依頼者を救おうと八面六臂の大活躍なのである。話の冒頭，依頼者の工場に特許権者が乗り込んできたと聞いて，ホテルを飛び出して車を飛ばしている主人公は「特許公報と審査経過，あとネットの諸々の情報を徹夜で読み込んでいたせいで，肌は荒れていた。」というくだりで，もう完全に主人公に感情移入完了。物語は，大鳳未来が弁理士としての知恵と勇気で，侵害警告を受けたVTuber（このキャラクターも美しくて才能あふれる女性）を守るという話である。「特許で才能を守ることも，失うには惜しい才能を特許から守ることも，どちらも弁理士の仕事です」「あなたの才能は私が必ず守ります」なんて，決め台詞もあって，しびれる。弁理士ってこんなにカッコいい仕事だったんだ。

ところでこの小説，特許権侵害の話をするのに，特許請求の範囲の説明や対象製品との対比が必要になるはずだが，そんな説明が出てきたら，せっかく弁理士未来の活躍にハラハラドキドキして読み進めてきた読者は皆どこかに行ってしまうはずだがどうなるんだろうという，弁理士読者ならではのハラハラドキドキも楽しめる。そこのところは実にうまく処理されているのだが，それもそのはず，作者は現役の弁理士とのこと。

そしてこの本，見事に2022年の「このミステリーがすごい！」大賞に輝いてしまったのである。ここのところ，近所の書店に行くとこの本が平積みされていて，そ

れを眺める度，なぜだかとても誇らしい心持である。

こうなれば，南原氏には女弁理士大鳳未来シリーズを次々に刊行していただきたいものである。そして，職業は「弁理士です」と答えた際には，「大鳳未来と同じですね」と言われるようになることを願っている。しかし，大鳳未来は若く有能なハードボイルドの主人公，「はい，そうです」と答える私の目は，きっと泳いでしまっているに違いない。